私論 太宰治

上方文化へのさすらいびと

浅田高明

浅田高明

私論 太宰治

上方文化へのさすらいびと

文理閣

著者紹介

浅田　高明（あさだたかあき）

1930年，富山市生まれ。

京都大学医学部卒業後，京都大学結核胸部疾患研究所で結核，呼吸器病学を専攻。現在，ダイハツ工業株式会社京都工場診療所長。医学博士。太宰文学研究会会員。

著書『太宰治の「カルテ」』『太宰治―芸術と病理』（共著），他太宰治関係論文多数。

現住所　〒601-13　京都市伏見区醍醐勝口町２－１

私論 太宰 治

1988年５月19日 第１刷発行

著　者　浅　田　高　明

発行者　黒　川　美　富　子

発行所　図書出版　文　理　閣

京都市下京区七条河原町西南角
〒600　TEL（075）351－7553

© Takaaki Asada

ISBN 4－89259-130-0

「太宰研究」の新しい収穫

石上玄一郎

1.

数ある『太宰治論』の中でも、浅田高明氏の「私論太宰治」は近来にないユニークな著書である。

私は先ず「上方文化へのさすらいびと」なるサブタイトルに思はず瞠目した。私の知る限り、こうした側面から太宰の人間像を追求した評論家は、これまでなかったからである。

そう言えば太宰と限らず、津軽地方の人々の上方文化に対する渇仰には昔から度外れたものがあった。彼らは文化は上方から「北前船」(弁財船ともいう)に乗って海をわたってやってくるものと思い込んでいたのだ。

「北前船」というのは著者もふれておられるように近世に大阪と北陸や越後、さらに津軽、松前まで運航した廻船で、大てい春先に大阪から砂糖、塩、雑貨類を積んで出航し、それを売って北国の米や、松前の四十物(あいもの)(海産物)を買い込み、難波の港へ帰ってきたから、「北米船」とも記されている。

私の好きな津軽民謡に「あいや節」というのがあるが、これなど民謡研究者によれば、もと北九州の「ハイヤ節」に発し、北前船によって日本海沿岸いったいの地に流布され、津軽に到来して、かの

哀婉きわまりない曲調になったものと云はれている。

上方と津軽地方との交流は既に王朝の昔からあったようで、浅田氏もこの書の「民話・伝承と歴史の謎」のくだりで述べておられるように「安寿・厨子王の物語り」として名高い『山椒太夫』の民話からもうかがわれる。

ところで、森鷗外作の『山椒太夫』では、安寿姫と厨子王丸のふるさとは磐城国伊達郡信夫庄となっているから、現在でいうなら福島県の東部にあたる筈だが、これが津軽へ行くと、どういうものか「磐城」が「岩木」に付会され、安寿姫がいつか岩木山大権現の祭神となっているのも不思議である。

尤も民俗学者の説では「山椒太夫」なるものは、この物語に出てくるような丹後の由良の人買い長者などではなく、もともと諸国をわたり歩き、こうした民話、伝承を語ることを生業(なりわい)とした、旅の「祭文(さいもん)語り」のことだったというから、彼らが廻船に乗って流浪する先々で、話の筋書きが、その土地の人々の気に入るように変えられたものと思はれる。

津軽の人々がよく藩主と近衛家との縁故を口にするのも同じような例だが、その由来を明せば次の如くだ。

津軽藩の初代、大浦為信はもと南部藩に臣従していた一豪族に過ぎなかったが、主家の内紛に乗じて独立した。時あたかも元亀、天正の頃、群雄割拠の戦国時代である。

だが天下はやがて豊臣秀吉の統一するところとなり、諸候は先を争ってその幕下に馳せ参じた。為信もまた天正十八年二月、家臣十八名を引き連れて京都に向ったが、秀吉は既に小田原に出陣したあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

とだった。大へんな失態を演じたことになるが、為信は一向に慌てる風もなく、その足で直ちに近衛家へ伺候した。

そこで、どう取り入ったものか、そのあと沼津では近衛家ゆかりの者と称し、秀吉に謁見を許されている。つまりそれによって為信は津軽領四万石を保証する御朱印状を秀吉から授り、小藩ながら独立大名となることができたというわけである。

2.

こうした伝承からして津軽の人々の上方文化に対する渇仰もなるほどとうなづけるが、では作家太宰の場合はどうだったのか。

周知のように太宰は青森県金木町の生れであり、中学は青森、旧制高校は弘前、大学は東大、作家生活に入ってからもずっと東京住いで、生涯のすべてを東北と関東で送っている。

その限りでは彼と関西との関係は殆ど問題にならないかの如くだ。しかもさにあらざることを解明したところに、この「私論太宰治」なる著書の特異性がある。

私自身、これまで気付かずにいて今度これを読み、なるほどそう言はれてみれば……と思うふしぶしが多々あった。

例えば旧制高校時代、太宰の誘いに応じてはじめて富田新町の彼の下宿に遊びに行ったときのことである。部屋に入るなり先ず目を奪はれたのは壁にかけてある太棹の三味線で、書生っぽの部屋らし

からぬ、そのなまめいた雰囲気が、何とも印象的だった。

これはあとで知ったことだが、その頃、彼は竹本咲栄という芸者あがりの女師匠について義太夫を習っていたのである。

「何でも野崎村、壷坂、紙治など一通りは覚え込んでいた…」と彼自身、作品の中で述懐しているから、かなりな熱の入れようだったに違いない。

言うまでもなく「義太夫節」は人形芝居をともない上方を代表する音曲であり、今日では文楽座を中心に、豊竹山城少掾らによって語られていることは誰でも知っているが、太宰の上方文化に対する憧憬は、こうした形で、既にこの頃からはじまっていたのだ……と今にして思いあたるのである。

例えば、上記の「紙治」とは近松門左衛門作の世話物『心中天網島』の主人公、紙屋治兵衛のことで、治兵衛には、おさんという貞節な女房と二人の子がありながら、紀の国屋の小春にうつつをぬかし、いろいろと波乱曲折の末、ついに心中するにいたるという筋書きだが、浅田氏は、はからずも太宰が死ぬ前の年の十月、改造に発表した小説『おさん』は、この治兵衛の女房おさんに由来すると考証されている。

なるほど、そう言はれてみると、この短篇は、ある生活力のない出版社勤めの男が以前、同僚だった女記者との関係を苦にしながら、革命のために死ぬの何のと大騒ぎをしたあげく、結局、信州諏訪湖で心中し、その死体を、あまりの馬鹿さ加減に呆れながらも、引きとりに行かざるを得ない妻の独白でできているが、つまりその妻の名が「おさん」なのだ。

浅田氏の考証によれば太宰がこの時、既に山崎富栄との情死を覚悟し、自分の死んだあとの妻の気持に思いをはせたかの如くで、無気味なものさえ感じられる。

何も近松と限らず太宰における上方文学の影響は西鶴や上田秋成、さらに芭蕉にも及んでいるとは浅田氏の力説されるところだ。

例えば昭和二十年に生活社から出版した彼の連作長篇『新釈諸国噺』の中の『粋人』は西鶴の『世間胸算用』の中の第二話を、『貧の意地』は『西鶴諸国ばなし』の中の「大晦日はあはぬ算用」を、『破産』は『日本永代蔵』の第五話、『赤い太鼓』は『本朝桜陰比事』をそれぞれ下敷にしているなど浅田氏の考証はいよいよ精細をきわめる。

芭蕉や上田秋成の影響に就いては、浅田氏以前にも、二、三の評論家によって指摘されたところだが、太宰文学の上方文化志向を、かくも一括して論じたのは、あとにも先にも浅田氏をおいてなかったことを、ここに銘記しておきたい。

ところで太宰のこうした上方文化に対する憧憬の由来を考えてみるに、おそらく、彼が子供の頃から聞かされていたに違いない「津島家系譜」なるものによって、祖先発祥の地を「山城の地」と思いこみ、それが終始、抜くべからざる先入観となっていたからではなかろうか。

むろん彼は、その系図が曽祖父、惣助の依頼によって檀那寺の和尚が作成したものであり、祖先発祥の地の山城国岩根郡対馬村なる地名などは何処にも実在しないことなど、知るべくもなかった。だがそうした先入観は生涯、彼につきまとって離れなかったばかりでなく、それはまた彼の心の支えで

もあった。

大地主の家の六男に生れ、青春の一時期、生家の封建的な重圧に反抗し左翼運動にはしり、作品の上では「家」を批判しながらも、その反面、彼は「上方以来の由緒ある家柄」の出であることを、こよなき誇りとしていたのである。

晩年（昭和二十三年四月）八雲書店から出版された最初の『太宰治全集』の表紙に、津島家の紋章が、型押しにして浮き出させてあるのをみても、それが分るというものだ。

3.

最後に太宰の上方文化への渇仰を物語るものは、その女性関係である。

彼の一代の傑作『人間失格』中の「第二の手記」の末尾は『背後の高い窓から夕焼の空が見え、鷗が、「女」という字みたいな形で飛んでいました』という言葉で結んである。

そのとき彼は自分でも、この一文が大いに気に入り、編集子に「女」という字を、くれぐれも誤植しないよう念を押したという話は、今もってジャーナリスト達の語り草になっているほどだ。

これでも分るように、女性関係を度外視しては太宰文学を語ることができない。

それにしても彼の生涯で、最も密接な関係にあった五人の女、小山初代、田辺あつみ、石原美知子、太田静子、山崎富栄のうち三人までが、関西とふかい関係があるのは果して偶然であろうか、太宰の上方文化に対する憧憬が、深層心理的に、女性に対してもまた働きはしなかったろうか。

浅田氏の新著はこの問題に就いてもまた、新たな地平を展開してみせてくれるのだ。

これらの女性達の中でこれまで素性の全く分らなかった田辺あつみに就いては、先に長篠康一郎氏が、驚くべき苦心と努力の末、明らかにされ、また当の情死の相手、「運命の女性」ともいうべき、山崎富栄に就いても、長篠氏は、世の非難、中傷にもめげず、寝食を忘れ、私財を抛ってまで、彼女を誤解と偏見から解放されるべくつとめられたことは、あまねく人の知るところである。

そして今、関西在住の臨床家である浅田高明氏は、長篠氏とはまた違った独自な視点から、この不思議にも郷里を同じくする山崎富栄と太田静子に就いて考証を進められている。

山崎に就いては「あまの刈る藻」の章で、太田に対しては「空色の人」のくだりで、それは単なる考証の域を超え、あるいは非命に倒れ、あるいは不遇のうちに身まかった彼女らに捧げられた切々たる鎮魂の歌となっていることに私は心うたれた。

ともあれこの書は「太宰文学研究」の上で近来にない収穫であることをここに強調しておきたい。

「太宰研究」の新しい収穫　石上玄一郎

Ⅰ　上方文化へのあこがれ

京都と太宰治――阿部合成との親交を視点にして――……三

二羽の鴉――太宰治と阿部合成――……一八

上田秋成と太宰治……二三

『雲雀の声』と『パンドラの匣』補遺……四四

無　常――長明・実朝・秀吉と大庭葉蔵――……七六

Ⅱ　太宰治への思いつれづれ

『嘘』における女ごころの倫理と論理……八三

月見草――竹久夢二と太宰治――……九一

墓銘碑……一〇五

空色の人……一一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

日　記……一二一
きょうこの人に――日本の文学と結核――……一二四

Ⅲ　作品の故郷をたずねて

回想御坂峠……一三七
伊豆・湯ケ野――川端康成と太宰治――……一四九
津軽紀行――深浦――……一六五
続・津軽紀行――『母』と鰺ケ沢――……一八六

Ⅳ　上方文化へのさすらい

民話・伝承と歴史の謎――太宰治の生家・津島家発祥の地名をめぐって――……二一三
『浦島さん』と太宰治――不老不死の青春文学――……二二一
『惜別』余談……二二五
あまの刈る藻……二三一
『犯人』に現われた心象風景――歌舞伎・浄瑠璃と俳諧を視座とした或る分析――……二五六
『犯人』と堀川――古典を生かすパロディイの名手――……二八六

太宰治とおけら……二九〇
太宰治の『津軽』と橘南谿の『東遊記』……三〇三
付　太宰治の『津軽』で新説
ききんの引用ないのは削除の写本参考にした……三三七
あとがき
初出誌一覧

I

上方文化へのあこがれ

京都と太宰治

――阿部合成との親交を視点にして――

戦前、太宰治が青森県五所川原町の中畑慶吉氏に宛てた書信の中の一通に、京都・醍醐寺の絵葉書を使ったものがあったという。

いったい、太宰は当時どのようにして、この絵葉書を手に入れたのであろうか。

一般に、太宰治と関西地方との関連は、その生い立ちや、また、彼の生涯における行動の範囲から推して、あまり深くはなさそうに思える。

事実、そのことに関して彼自身も、昭和十六年一月に発表した『佐渡』の中で、次のように述べている。

関西の豊麗、瀬戸内海の明媚は、人から聞いて一度はあこがれてもみるのだが、なぜだか直ぐに行く気はしない。相模、駿河までは行つたが、それから先は、私は未だ一度も行つて見たことが無い。もつと、としとつてから行つてみたいと思つてゐる。心に遊びの余裕が出来てから、ゆ

つくり関西を回つてみたいと思つてゐる。

元来、東北に生まれ、関東に住んで、主に東日本しか知らなかった太宰治が、ゆくゆく一度はたずねてみたいと思っていたらしい関西の風土や、その昔、都のあった京都という土地柄に対して、はたしてどのような関心を抱いていたのか、そしてまた、実際にはどの程度のつながりがあったのか、を探ってみたり、考えてみたりすることは、先の絵葉書の入手方法への疑問はさておいても、ちょっとおもしろい話題ではある。

そもそも彼の書簡集をひもといてみて、その手紙の中に、実際に京都という地名が頻繁に登場してくるのは、戦後になってからである。すなわち、昭和二十一年一月二十五日、その頃京都に在った弟子の堤重久氏に宛てて、太宰は疎開先の津軽の生家から、次のような手紙を出している。

拝復、とにかく御無事の御様子、何よりです。こちらは浪々転々し、たうとう生れた家へ来ましたが、今年の夏までには、小田原、三島、または京都、なんて考へてゐる。東京には家が無いだらうから、東京から汽車で二、三時間といふところ、そのへんに落ちつく事になるだらうと思つてゐる。

天皇が京都へ行くと言つたら、私も行きます。（後略）

ちょうどその頃より、太宰は、戦前から交際のあった神奈川県下曽我の大雄山荘に住む太田静子との文通を再開し、またその近くには、先輩作家の尾崎一雄氏も住んでいた関係上、東京近辺の小

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.